

続・角の位相的性質 —ラジアンと三角関数—

かめさん @cogitoergosumkm

角の位相的性質で書き逃したラジアンと三角関数についてかく．ここでは，微分同相を扱う．
 $S^1 = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x^2 + y^2 = 1\}$ とする．

$$U_+ = S^1 \setminus \{(-1, 0)\} \quad (1)$$

$$U_- = S^1 \setminus \{(1, 0)\} \quad (2)$$

と定義し，

$$\phi_+ : U_+ \ni (x, y) \mapsto \frac{y}{x+1} \in \mathbb{R} \quad (3)$$

$$\phi_- : U_- \ni (x, y) \mapsto \frac{y}{x-1} \in \mathbb{R} \quad (4)$$

逆写像は， ϕ_+ については，

$$\begin{cases} t = \frac{y}{x+1} \\ x^2 + y^2 = 1 \end{cases} \quad (5)$$

を解くことでわかる． $x \neq -1$ だから，

$$x^2 + t^2(x+1)^2 = 1 \quad (6)$$

$$(x+1)((t^2+1)x + (t^2-1)) = 0 \quad (7)$$

$$x = \frac{1-t^2}{1+t^2} \quad (8)$$

$$y = t \left(1 + \frac{1-t^2}{1+t^2} \right) = \frac{2t}{1+t^2} \quad (9)$$

ϕ_- も同様にして，

$$\phi_+^{-1} : \mathbb{R} \ni t \mapsto \left(\frac{1-t^2}{1+t^2}, \frac{2t}{1+t^2} \right) \in U_+ \quad (10)$$

$$\phi_-^{-1} : \mathbb{R} \ni t \mapsto \left(\frac{t^2-1}{t^2+1}, \frac{-2t}{t^2+1} \right) \in U_- \quad (11)$$

よって全単射であり，また連続性からこれらは同相写像である．

$t \neq 0$ とすると，

$$\phi_- \circ \phi_+^{-1}(t) = \frac{\frac{2t}{1+t^2}}{\frac{1-t^2}{1+t^2} - 1} \quad (12)$$

$$= -\frac{1}{t} \quad (13)$$

となる。よって $\phi_+ \circ \phi_-^{-1}(t) = -\frac{1}{t}$ もいえる。 $S^1 = U_+ \cup U_-$ であるから、 $\{(U_+, \phi_+), (U_-, \phi_-)\}$ は C^∞ 級アトラスである。

$p_x((x, y)) = x, p_y((x, y)) = y$ とすると、 $p_x \circ \phi_\pm^{-1}, p_y \circ \phi_\pm^{-1}$ は無限階微分可能である。

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{1-t^2}{1+t^2} \right) = \frac{-4t}{(1+t^2)^2} \quad (14)$$

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{2t}{1+t^2} \right) = \frac{2(1-t^2)}{(1+t^2)^2} \quad (15)$$

だから、無限階微分可能関数 (C^∞ 級関数) u で、微分方程式

$$\frac{d}{ds} u(s) = \frac{1+u(s)^2}{2} \quad (16)$$

の解となるものをとれば、

$$\frac{d}{ds} p_x \circ \phi_+^{-1}(u(s)) = \frac{-2u(s)}{1+u(s)^2} = -p_y \circ \phi_+^{-1}(u(s)) \quad (17)$$

$$\frac{d}{ds} p_y \circ \phi_+^{-1}(u(s)) = \frac{1-u(s)^2}{1+u(s)^2} = p_x \circ \phi_+^{-1}(u(s)) \quad (18)$$

である。そこで $u(s)$ を求めてみたい。変数分離型の微分方程式だから、

$$s = \int \frac{2}{1+u^2} du \quad (19)$$

だが、 $|u| < 1$ では $\frac{2}{1+u^2} < 2$, $|u| > 1$ では $\frac{2}{1+u^2} < \frac{2}{u^2}$ を利用すれば $\int_{-\infty}^{\infty} \frac{2}{1+u^2} du < \infty$ である。そこで、

$$\pi = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{du}{1+u^2} \quad (20)$$

と定数 π を定義しておき、 $g: \mathbb{R} \rightarrow (-\pi, \pi)$ を

$$f(k) = \int_0^k \frac{2}{1+u^2} du \quad (21)$$

と定義する。これは連続かつ狭義単調増加であり、 $k \rightarrow \pm\infty$ の極限をそれぞれ考えれば全単射である。 $u = f^{-1}$ とすればこれは微分方程式 (16) の解となる。さらに、 $s \in \mathbb{R} \setminus \{2\pi(n+1) \mid n \in \mathbb{Z}\}$ にたいして、 $s + 2\pi n \in (-\pi, \pi)$ となるような整数 n をとることができるから、これを $n = v(s)$ とかくことにすると、

$$u(s) = f^{-1}(s + 2\pi v(s)) \quad (22)$$

によって、 $u: \mathbb{R} \setminus \{2\pi(n+1) \mid n \in \mathbb{Z}\} \rightarrow \mathbb{R}$ を定めることができる。 $\xi(s) = p_x \circ \phi_+^{-1}(u(s)), \eta(s) = p_y \circ \phi_+^{-1}(u(s))$ は、連続性を仮定して $s = \pi + 2\pi n$ にも定めることができ、

$$\xi(\pi + 2\pi n) = -1 \quad (23)$$

$$\eta(\pi + 2\pi n) = 0 \quad (24)$$

である。ここでは別の方針をとり、 ϕ_- を利用して定義することにしよう。

$k > 0$ のとき、 $u = -1/v$ と変換すると、

$$\int_0^k \frac{2}{1+u^2} du = \int_{-\frac{1}{k}}^{-1} \frac{2}{1+v^2} dv = \pi + \int_0^{-\frac{1}{k}} \frac{2}{1+v^2} dv \quad (25)$$

となり, $k < 0$ のとき, $u = -1/v$ と変換すると,

$$\int_0^k \frac{2}{1+u^2} du = \int_{\infty}^{-\frac{1}{k}} \frac{2}{1+v^2} dv = -\pi + \int_0^{-\frac{1}{k}} \frac{2}{1+v^2} dv \quad (26)$$

となる. よって, $n \in \mathbb{Z}$ として,

$$u(s + \pi) = \begin{cases} -\frac{1}{u(s)} & (s \neq \pi + 2\pi n) \\ 0 & (s = \pi + 2\pi n) \end{cases} \quad (27)$$

とである. $s \neq \pi + 2\pi n$ のとき,

$$p_x \circ \phi_-^{-1}(u(s + \pi)) \quad (28)$$

$$= \frac{\frac{1}{u(s)^2} - 1}{\frac{1}{u(s)^2} + 1} \quad (29)$$

$$= \frac{1 - u(s)^2}{1 + u(s)^2} \quad (30)$$

$$= p_x \circ \phi_+^{-1}(u(s)) \quad (31)$$

$$p_y \circ \phi_-^{-1}(u(s + \pi)) \quad (32)$$

$$= \frac{\frac{2}{u(s)}}{\frac{1}{u(s)^2} + 1} \quad (33)$$

$$= \frac{2u(s)}{1 + u(s)^2} \quad (34)$$

$$= p_y \circ \phi_+^{-1}(u(s)) \quad (35)$$

となるから,

$$\xi(s) = \begin{cases} p_x \circ \phi_+^{-1}(u(s)) & (s \in \mathbb{R} \setminus \{2\pi(n+1) \mid n \in \mathbb{Z}\}) \\ p_x \circ \phi_-^{-1}(u(s + \pi)) & (s \in \mathbb{R} \setminus \{2\pi n \mid n \in \mathbb{Z}\}) \end{cases} \quad (36)$$

$$\eta(s) = \begin{cases} p_y \circ \phi_+^{-1}(u(s)) & (s \in \mathbb{R} \setminus \{2\pi(n+1) \mid n \in \mathbb{Z}\}) \\ p_y \circ \phi_-^{-1}(u(s + \pi)) & (s \in \mathbb{R} \setminus \{2\pi n \mid n \in \mathbb{Z}\}) \end{cases} \quad (37)$$

と定義すれば, 場合分けの重複した部分では同じ関数である. これで, 無限階微分可能な関数 $\xi, \eta: \mathbb{R} \rightarrow [-1, 1]$ が定義できた. 式 (17)(18) から $\xi'(s) = -\eta(s), \eta'(s) = \xi(s)$ であり, $u(0) = 0$ で定めたから $\xi(0) = 1, \eta(0) = 0$ である. 微分方程式の解の一意性から $\cos = \xi, \sin = \eta$ と定めてよい.